宍粟郷土研究会報
No. 26
41. 11. 20
兵庫県宍粟郡
山崎町
教育委員会報
宍粟郷土研究会
電話 750番

宍粟鉄山の経営者（二）

千草屋源入居士と貞把居士

宇野正碩
（山崎高校）

☆

千草郷から初めて山崎町に出て鉄山師となつたのが六郎兵衛（後に源右衛門）源入居士で、その跡を継いだのが二男市郎兵衛（源右衛門を襲名）貞把居士であることは前回に述べた。

この父子共に大阪に出店をつくり、宍粟鉄の販売を行なつて一族共に繁栄し、かなりの財産を築いたが又孝心に厚い人であつたことが知られる。即ち、千草町西蓮寺は浄土宗に属し千草念仏で知られる寺であり、平瀬家はその檀那であつたが、この寺の梵鐘は源入居士が両親の菩提を弔うために寄進したものであつた。

「善いかな父の志を継ぎ、父の事を継ぐもの。孝子の至情は古今の通義にして易るべからざるなり。然れども不肖の徒、まさに多くして継ぎて、その美をなし、その任を負荷するもの、またすくなし。

播州宍粟郡安国山西蓮寺の鐘は、同州千草邑の人、平瀬源入居士、慶安辛卯（四年）夏、雙親五十回の忌辰に鋳してもつて、瞑福を祈る所なり」（播州西蓮寺鐘銘並序）

梵鐘はなかなか高価なものであり、孝心の深さはさることながら、一個人の材力で寄進することは相当の財力がなければできることではないから、初代源右衛門は鉄山師をは

目次

宍粟鉄山の経営者(二)……宇野正碩 1
観音堂の絵馬……堀口春夫 4
平山騒動覚書……栗山宗知 5
平瀬長水の「射学要録」(一)……島田清 7
但馬見学旅行記……9
郷土だより……10
哀悼横井怒一氏……11
会員名簿 二十一……12
雑報……12

じめて十七・八年で、これまでの財を築いたということになる。源入居士は両親の五十回忌を営み、梵鐘寄進のことを行なつて七年後（万治二年）八十六才で歿している。

彼が寄進した梵鐘は、梵鐘専門の鋳物師の手になるものだろうか。鉄山師の支配下には鋳物師も居たのではなかろうか。

「年、二十余霜を経、銅質美ならず、鎔範精ならず。鯨魚も一鑿蒲たり。牢忽として破る」（同前）

とあるのはこんな疑問をいだかせる。あまりにも早く破損しているからである。

この推測は当を得たものでないとすれば、専門の鋳物師は誰であろうか。姫路の野里には芥田氏があり、播州一円の鋳物師を支配していたのであり、京都方広寺大仏鋳造の事業も彼の手になるものである。この頃から五十年ほど下ると、城下村金屋の長谷川氏が西播各地に梵鐘を鋳造した記録も現われるのである（万治元年、西光寺鐘。宝永元年三方、多加美大明神鐘。宝永五年には揖西郡時重、西勝寺半鐘）。

城下村金屋の長谷川氏の鋳物師をはじめた年代は、明確でないので万治年間より以前に、すでに宍粟郡で鋳物師として活躍していたとしても、あながち無理ではないと思われる。

又この源入居士が鉄山師として活躍した時期には、有名な刀匠も宍粟鉄を利用している。即ち慶安前後に「藤原宗長」が住んでいたし祐定も来郡、鍛刀し「備州長船住祐定於播州造之、慶安元年八月吉日」の刀は姫路の松岡氏が所有されている。

☆

前項で述べたように源入居士の孝心こめた梵鐘は破損してしまつたのだが、その子、貞把居士が又なかなかの孝行者で、直ちに再鋳して亡父の遺志をつらぬいたのが延宝五年であつた（この年山崎藩では松平数馬が死んだ）。

「嗣子、貞把、これを憂うるや深し。故に今歳丁巳、火官をして、これを改鋳せしむ。けだし、亡父の遺意を、つがんとなり」（同前）

このときは「火官」と表現しているが、単なる文章表現上の綾と解すべきか、専門の鋳物師と解するか。疑問を提示しておきたい。

この再鋳の梵鐘は立派な出来栄えであつたらしい。

「新鐘すでに成りて懸く。宝楼の鯨音は則ち六時を警め、獅吼は則ち、萬霊に感ず、（匂々）として響を発し、遥かに大雲の挑むを知る。隠々たる動声は思を豊山の霜に□、暗夜の迷夢は、五更の深省を発さしむ」（同前）

と、この立派さを称えているし貞把の孝心についても

「あゝ、貞把の孝心は、一は、もつて、奉先の義にあ

り、一は、もつて継述の道をえんとす。一挙にして、二美を備うる者というべし。しかれば、すなわち、□父はかならず孝子を待ちて、その功を全くす。積善の余慶、不朽の盛華、何をもつてか、これに、加えん」（同前）

と、口をきわめてほめそやしているが、やはり千草屋の鉄支配による財力がなければできえないことであろう。惜しいことにはこの翌年、延宝六年に死去しまつている。

この貞把の時代には刀匠「祐定」の活躍した時代であり「備前国住長船祐定、宍粟鉄作之、横山与三兵衛（古今拠鍛冶備考）」がある。祐定は随分の同名異人があるので、前項の祐定とこれと直ち同一人とすることは如何であろうか。

又、貞把の時に千草屋にとつて祖先の功績により面目をほどこす事件があつた。それは最初に西蓮寺鐘寄進の理由であつた源入居士（初代源右エ門）の父が、長水城落城の時に左の手を失いつつも（後に手棒殿という）生きのび、そのあと千草郷から羽柴筑前の輩下であつた加藤公（後の大洲候の先祖）に兵粮、煙硝など供給した功績を認められて大洲候から召し出され御紋付、御時服を拝領し五人扶持を賜わる（明暦三年）という光栄に浴している。このことは全く彼の祖父にあたる手棒殿、即ち清正、六郎右衛門のおかげであつた訳であるから、その祖父の供養のための梵鐘が破損したとあつては、何をおいても再鋳する責任が彼、貞把にあつたことであろう。

ついでながら河呂村に現在「七軒鍛冶」という所があつて、伝承によると七軒の鍛冶屋があつたという。今でも前鍛冶屋、後鍛冶屋と呼ばれる家があるが、ここはおそらく千草鉄を材料とした鍛冶集団の旧地と考えられる。何時頃から、どんな種類の製品を作つたか、判然としないけれども西蓮寺過去帳では、宝永三年頃から河呂鍛冶八右エ門、三右エ門祖母（宝永五年）の名が見られるので、この頃からあるいはこれ以前からこの地が刀鍛冶の居住した土地ではなかつたかと思われる。和漢三才図会（正徳二年）では宍粟に鋼鉄、鋤鍬の産物が記されている。

備前祐定や藤原宗長、多々良長幸（貞享三年）などもこの地において鍛刀したのではあるまいか、もつと推測すれば中世の延徳・明応年間に「作州宗光、於播州千草作之」の刀など、この河呂七軒鍛冶屋敷と関係があつたとすることもできるかも知れない（昭和四一・一〇・一五稿）。

酒銘
こと笑
本家門前屋醸造
電話 三九

観音堂の絵馬

―桑田四郎右エ門氏常のこと―

堀口春夫

正徳の昔、ある秋の事城下の村々、特に段、鶴木村の野を荒す怪獣が居た。その被害が甚大なので村人達は大いに憂へて、多くの百姓達を庄屋松井邸に集めて相談し、夜なを夜なあらわれる野荒しの正体を突とめるべく番をした。

夜更けて待ちくたびれた百姓達が、とろりと居眠りをした頃、何故よりか蹄の音がして、あらわれたのは怪獣に非ずして一匹の裸馬でした。そして稲と言はず大豆と言はず食い荒し始めた。百姓達は驚いて、おのれこのいたづら馬奴と手に手に鍬や竹棒を持て追い廻したが、駿足のこの馬には歯が立たない。追へば逃げる。近よればけ散らし、凄い歯をむいて荒れ狂う様は、真に恐ろしくて百姓達の手に負へない。一同疲れ果てゝ東が白みかけた頃には馬は悠々と引上げて行く。そこで一人の若者が一体此馬は何所から出て来るのかと、後を付けた行つた所が驚いた事に、段の観音様の絵馬の中に入り込でしまいました。村人達もこれにはびつくりして、観音様のお怒りかも知れぬと、庄屋より御家中の馬術教範であつた桑木四郎エ門氏常殿にお願いして、この荒馬を捕へて再び出ない様にして貰ふべく懇願した。四郎右エ門は承知して早速夜中に現場に趣き、荒れ狂ふその馬を見事に捕へ、観音様の絵馬堂に追い込んだ。村人達は大喜び、さすがは馬術御指南役とほめたゝへました。さて桑田氏常はこれではまだ覚束ないと、馬の手綱を横木にくくり、更に馬が最も恐れる竜の画を書いて絵馬堂の天井に張りつけ、馬ににらみをきかせたという伝説である。

ところが其後殿中でも、桑田氏常の事が城下でも騒がれて居るのを聞いて、面はゆい当の桑田氏が朋友の遠藤彌十郎にもらした述懐は、誠に珍奇なもので「ヤア遠藤氏」その話しをされると拙者真に面恥ゆい。いやあの時程面白かつた事はご座らぬ。野荒しの張本が拙者の持ち馬とは驚いた。庄屋の松井奴よう知り乍ら俺に当つけたのよ・・・日頃曲芸を仕込んでいるあの馬の事だし、拙者が毎日の様に裏口から桜の馬場へ引いて行く、その道筋を良く覚へよつての其上放し馬の悪へきがつきよつて、夜中に厩倉を出て夜歩行する。庄屋の松井から観音の馬が出て困るから百姓では手にをへず、馬術師範で無くては手に合わぬと洒落れて来られての、承知したものの夜中の事だし再三の依頼にいよいよ出かけようとして仲間に馬を引出させにやつた所が、馬屋に馬が居ないといふ。いや此時は驚いた。ひよつとすると俺の馬ではないかと一寸気になつたが、仕方がないから徒歩で行つて見ると、案の定拙者の馬じや。百姓に追はれて荒れ狂つて居た馬が、拙者と気付いて鼻すりよせて来

た。百姓達は「さすがお馬の先生よ」などと追従を申しよつたが、某も其場ととりすましての・・・観音の馬なら観音様に願をかけて置こうと、観音様につれて行き悪へきの直りますよう頼んだ上、此馬は一応預つてをくと言つて連れ帰つたものじや。観音様にも其ままじやすまされぬので竜の絵を献上して絵馬のおさへにしたまでじや。お陰で竜の絵はうまくなつたぞ。各々方にも一筆描いて進じようかい。

此を聞いた彌十郎初め一同は、城内溜りの間で爆笑したと云ふ事である。以上遠藤家の伝承話であるが真実の事らしい。

今もその竜の画が観音様の絵間堂にある。桑田氏正徳五年献納とある。中々に達筆に描かれている所氏常は馬術ばかりではなく、絵心もあつた方らしい。当時の屋敷は、現博愛病院の東向いで裏が今の中学校運動場あたり、昔お菜園のあつて桜の馬場に通じてゐる曲芸をやるくらいの馬だから厩舎をぬけ出るくらいはわけはなかつたのであろう。

新車から販売、修理、車検、中古車まで
山陽自動車工業K.K
山崎町庄能133の1 TEL 345・344 (販) 343

平山騒動覚書

栗山宗知

当地方の年配の方は、平山騒動ということをいくらか耳にせられている筈である。然し、その真相は全く不明という外はない。資料が全くないのである。あるおばアさんからは、えらい「ごうそう」があつてね。と言つた話を聞く程度である。赤松啓介氏の「兵庫県百姓騒擾年表」によると、県下で百八十七件記録されている。明徳三年（一三九三年）赤穂郡矢野荘から明治十一年（一八七八年）加古郡野寺村の事件まで、早期、前期、中期、後期、晩期と五期に分けていられるが、平山事件は洩れている。本郡の分二件も記録されており、中期の明和九年四月（一七七二年）伊和神社の宗論紛争と後期の天保四年（一八三三年）金谷村物高騒動である。とにかく、資料皆無であるが、平山騒動は、山崎藩の大事件であつたことに間違いない。

この事件のため、隣藩の竜野藩は香山の毛抜岩迄、佐用森藩は木谷坂迄、安志藩は安志沢まで応援隊が来たと伝えられ、鎮圧本部を山崎町大雲寺に置いて対処した。山崎藩の武間源右エ門家老が採配をとり、十五才以上二十才迄、二十才以上三十才迄、三十才以上四十才迄と三隊編成、百余人を繰出したという。この事件の真相を知るため、十数

年前に山崎、河東の古老ら五十人近い人々に聞きまわり、そのモメをとつたのがあるから記して参考としたい。

原因の一は、山崎藩の同心であつたが、酒の上で家中の者と喧かして追放され、それを恨んで事を起した。二は、不作続きの百姓の難儀を救う為であつた。

平山弁蔵は、元山崎藩の同心・・・五〇%、浪人者・・・二〇%、不明・・・三〇%

背丈は、大きい男・・・三〇%、普通の男・・・五〇%、小さい男・・・二〇%

剣術は、達人・・・三〇%、達人でない・・・七〇%、

妻子は、三人・・・三〇%、四人・・・一〇%、不明・・・六〇%

原因は、重税のため・・・七〇%、藩主を恨んで・・・二〇%、不明・・・一〇%

最後の逃亡場所は、今宿・・・七〇%、高所・・・三〇%、騒動の年は、明治以前・・・三〇%、明治以後・・・七〇%

以上の結果であつたが、私説を附加さして頂くと次のとおりです。名前は、平山弁蔵、山崎藩の同心をやめて、高所の小林伝兵衛氏を頼り、田を借り、二畝ほどある土地に六畳と四畳半ほどの家を建ててもらつて居住した。この小林氏は、太い腹の人で、資産家でもあり、浪人や力士等の食客が、いつも数人いたと伝えられている。平山はここで、村内の若者を集めて学問、武術を教えていた。そして、安政から文久年間にかけての不作続きで、年貢米のいざこざの結末として騒動に持ちこんだのかと思う。時期は、元治元年夏と推定、ことの起るや、山崎町内の騒ぎも大変で、一揆が三津まで来たとか、噂が噂を生んで夜も寝られなかつたとか。高所部落は、地元であるだけ、男子全部出動、中村、神谷部落は、若い男半数以上高所に集結、矢原、岸田部落は、百余人岸田の宮に集り、竹やりを持つて気勢をあげ、三津、今宿方面の者は、いつでも応援できる態勢で夕食を早くすませて、竹やりとわらじを家の入口に用意していたという。応援に加わらぬと殺されると噂が拡がり、皆大変心配したとのことである。勿論、警鐘や寺の鐘を乱打して大騒ぎしたことだが、結局中村で二、三人引かれて行つただけで、主謀者ら三谷へ逃げて、他の村々は無事にすんだのであつた。

その後の平山の足どりは不明だが、明治五、六年頃に今

結納調達
平田屋
食料品店
福岡市三五六

宿の平瀬氏を頼つて、今宿に家を建て、田を一反二畝ばかり耕作して、三百代言を業としていたという。それも十年ばかりして、竜野方面へ転宅したと伝えられているだけである。

平瀬長水の射学要録（一）

島田 清

平瀬長水のことについては、本誌第拾七号にその概要を掲げておきました。しかし伝記的なことは、その後もわかつておりません。もし、戦前であつたならば、墓石の調査をおこなう人もたくさんあり、江戸の諸寺について調査することも可能ですが、戦後は、寺院の被災、史料の散失・湮滅が甚だしく、また、都市計画による墓石の移転などもあつて、その調査が非常に困難となりました。したがつて平瀬光雄・光孚父子のことについても、今後、長い目をもつて注意してゆくよりほかにしかたがありません。そうしたことのために、平瀬父子の事業なり、業績なりをできるだけ詳しく理解しておくということはやはり必要なことであると思われますし、近年は、スポーツ・武道の盛行につれて弓術の稽古もさかんになつて来ています。わが国の武道のうち、最も古いものの一つであり、また、年を取つてもかわらずやつて行けるということのために、今なお広く行われている弓術について、郷土の先賢平瀬長水がどのような説明を行つているか、その最初の労作であり、代表的な著書でもある「射学要録」の全文を次に掲げてみましょう。

猶、書誌学的なことを附記しておきますと、この「射学要録」には特製本と並本の二種があります。前者は、縦二六・七センチ、横一八・一センチ、厚手の杉原紙を使い、薄褐色の表紙をつけています。また、後者は、縦二五・一センチ、横一七・七センチ、少し薄手の杉原紙を使い、暗黄色の表紙を付けています。丁付や奥付など、すべてかわりませんから、現在の言葉でいうと、後者は普及版ということになりましょう。

「射学要録」

射学要録　序　　乾巻

長水平瀬君、蒙士の射学を啓発するをこころざし、要録二巻を撰す。余が、嘗て、これを身に求むるの末列をけがすの故を以て、特に一言を徴て曰く、瑣々たる小枝、更に重きを名高の文、春華の如きに籍り、己を衒ひ、耳食児を驚動せんことを欲せず。幸、吾子の此に旧相識たり。敢て高

誼を請うこと。辞することを獲ず。乃ち叙して曰く、夫れ物あれば則りあり。弓矢の則りある。ただただ一張一弛、以て象あるのみならず、男子初生の三日、業已に縣弧の旧あり。由来すること尚しと謂つべし。蓋し聞く。旧の以て己むべからざるは維れ則りの存する所なり。昔、夏后、殷商の大命を傾くる、或は云う、旧を用いざるの職由する所なりと。成周氏の末に当り、またまた其の故歩を失し、之をよく正すもの莫し。孔子、其のかくのごとく羊を亡い、而して後、反覆・纂弑し、華の夷に変ぜんことを憂い、独り古訓を唱て萬世を木鐸し、銘鏤たる声教、其の忠臣義士を鳴すと云う。我が日出づる処、神明の邦の如き、固より己に旧を尚ぶの典あり。これを旧史氏の伝ふる所に考うるに、天神、地神の世、遥なる哉、遥たるも、然も、国姓みなみな同じ。其の、宝剣内を鎮し、弓矢外を服し、皇統を天地に配して無窮の極を建しより、今にいたるまで数千載、明々承て恭位する所、赫々述べて奏功する所、一つに是れ大中に協ひ、誠敬に本づき、之を戒むるに休を用し、之を薫するに威を用し、怠らず、忘れず、神武不殺の旧徳に率由す。是を以て、弩壊剖判、其来、未だ法を焼きて自ら始めとし、君を弑して新と号する者の出ることあるを聞かず。豈、美ならずや、方今、聖化隆盛、人文渙発する、猶、弓矢を以て之を藩屏の国士、大夫の家に称す。亦、ただただ無虞を儆戒する。先王の旧の以て己むべからざるに係ることあるのみ。孔子曰く、安くして危を忘れず、治れども乱を忘れざる者は、身安くして国家保んずべしと。是に於て、余、益々、平瀬君の為すところ、以て国家治教の備り具れる、宜しく人材を育て、遠として届らざるなきの盛なるを仰観すべきを知り、之を喜んで己まず。公、夫れ、上、神祇官天弓の故を受け、下、顓門名氏の射法に亘り、博く其の徴を系り、旁ら西書演武の与かる所を捜り、年を研精覃思に積む者の如し、別に示教辯疑、類製図式の数十編あり。行く行く、将に梓に寿して以て世の文事・武備なるに問はんとす。今、此の書は、それが為に嚆矢すと云う。

天明八年戊申春正月

越前、力丸光、撰並書 印

（原漢文）

射学要録序

紳士服別誂専門
坂元洋服店
貸モーニング致します
山崎町旭町
TEL. 186

余、幼ヨリ射の門ニ入、コレヲ学コト二十年。後、四方ニ遊ビ、諸老ノ門戸ヲ窺ヒ、盡ク其秘ヲ探ル。而シテ、時師ノ弟子ヲ教ルヲミルニ、其祖ノ伝ル所ト違モノ少カラズ、蓋、射ノ徳ヲ観ル、固ヨリニシテ、軍射ハ射ノ本、武用ノ尤忽ニスベカラザル者ナリ。

昇平年久シク、諸家ミナ軍射ニ於テハ置テ講ゼザルニ似タリ。易ニ曰、治ニ乱ヲ忘レズト。余ココニ於テ、和漢ノ書ノ射ヲ言モノ数十家ヲ考究シ、且、諸老ノ言ヲ訪ヒ、朝ニ考テ夕ニ試ミ、発明スル所アリ。編述スルモノ十有余部、イマダ稿ヲ脱セズ。授業ノ暇、平安ノ僑居ニシテ先ソノ射学要録ヲ梓ニ上シ、観徳武用ノ射ノ一端ヲ挙ルノミ。篇中、ママ言ヲ盡サズシテ口授ニ譲ル者アリ。此、カノ世ノ技家、コノンデ秘ヲ言ルニ倣ニアラズ。其コト、或ハ師資ノ相承ニシテ慢ニスベカラザル者ト、其ワザノ筆ニヨク盡シ難キ者アリ。故ニ、姑ク之ヲ口授ニ属シテ其言ヲ省ク。信ヲ篤シテヨク学ノ士ニ於テハ、余、ソノ両端ヲ叩キ、竭シテ惜ムコトナケン。

天明八年戊申春正月

長水平瀬光雄撰 印

（注）句読点は筆者の付けたもの。

（未完）

食料品
和洋酒
八百福商店
年末の御贈答に！
年始のご馳走に！
山崎町山田
TEL. 413

但馬見学旅行記

九月十八日、天気は悪いが出発する事と決り、午前六時半に百六十名が三台の観光バスに分乗して山崎を発車した。福崎より生野へいよいよ但馬路に入つた。雨の中でも変つた景色は珍らしく眺められる。八鹿より出石町へ出る。町内は車窓説明にとどめて町郊外にある但馬元の一の宮、出石神社に参拝した。平地にある広い神域で古社の風格は高く大鳥居、拝殿、本社など豪壮の建築であつた。車を豊岡市に進めて市内を通過した。大石良雄内室の神社前では車を止めて説明した。円山川に沿ふて行く途中、川向いの玄武洞を除行解説を聞つゝ城崎着は十一時であつた。

一同は朝霧荘に落着て大広間にくつろぐ。眺望のよい二階、三階に陣取る方々もあつた。ここで昼飯にして内湯に入り、温泉気分になつた。それでも中には外出して町内見学とか又外湯に説備の豪壮を喜んだ人もあつた。二時頃より車で日和山遊園に行く。雨稍小止みの中を傘さして見て廻る。黒い岩に白い波の寄する所岸辺の松も建物も調和して日本海の景色は中々によろしい。ゆつくり見て廻つてから乗車三時すぎ発車、帰路につき円山川の満々たる濁流を

従業員補欠募集
有限会社 山崎電光
山崎町左能 電五九三

車窓に、福崎を経て山崎帰着は七時であつた。雨の旅行であつたが、それだけ深い印象が残るのであつた。

郷土だより

菊花展

山崎菊の会主催の第五回菊花展は、十一月三日、四日の両日下村記念会で開催。出品約二百五十点。入賞者は左のとおり。

○町長賞—春井優男氏（段）○神戸新聞社賞—西川あや子氏（千本屋）○町会議長賞—谷林清一氏（門前）○商工会長賞—大谷みよ子氏（旭町）○福祉事務所長賞—宗平長城氏（中野）下村敬治氏（西鹿沢）○学校賞—山崎中学、都多小学、山崎小学、○菊の会賞—加藤一子氏（寺町）塚本孝氏（寺町）島本つや子氏（元山崎）大岩妙子氏（上寺）武野国太郎（上寺）早川淳氏（旭町）小椋忠太郎氏（田井）春名実氏（西鹿沢）田村文男氏（下広瀬）辛川繁一氏（寺町）、尚、同所小ホールで、建部恵潤氏（安富町皆河）の巻柏（イワヒバ）が、小畑耕二氏（東鹿沢）のさつき盆栽と共に展示され好評であつた。建部氏は、巻柏の稀なしゆう集家で、百数十種所蔵されている由。

美術展

山崎町と山崎美術協会主催の第二回山崎美術展覧会は、十一月六日から八日山崎中学校体育館で開催。第一部写真二八点、第二部絵画四一点、第三部書道展四三点、第四部工芸二四点、第五部手芸五一点の出品あり、参観者でにぎわつた。入賞者は左記のとおり。

写真 町長賞ー上野五美（山崎）、商工会賞ー上野正典（同）、ライオンズ賞ー中野孫蔵（同）、神戸新聞社賞ー田淵研之輔（同）、美術協会賞ー藤井慧乗（同）、教委賞ー大井直樹（一宮）

絵画 町長賞ー松尾文夫（山崎）、ライオンズ賞ー伊藤百恵（同）神谷清（同）猪尾保子（同）水口マチ子（同）美術協会賞ー田中美知子（同）、商工会賞ー八木智恵子（一宮）、教育委員会賞ー福岡久蔵（山崎）、神戸新聞社賞ー田中誠（安富）

書道 町長賞ー柳田弘（安富）、商工会賞ー堀一雄（山崎）木村吉計（一宮）太田了（同）、神戸新聞社賞ー志水

宏太郎（山崎）、ライオンズ賞ー大柿久子（山崎）平瀬進一（同）堂本剛（千種）、美術協会賞ー森裏きみゑ（山崎）教委賞ー尾崎珠城（山崎）

工芸 町長賞　友沢路風（山崎）、教育委員会賞ー西村英男（同）、美術協会賞ー前田昇（山崎）、神戸新聞社賞ー稲沢竜陽（同）、商工会賞ー前田寿美枝（同）、片山新（同）、ライオンズ賞ー池田平市（同）、志水宏太同（同）

手芸 美術協会賞ー西川和子（山崎）、神戸新聞社賞ー高倉啓子（同）、ライオンズ賞ー谷口道子（山崎）西川賢智（同）、商工会賞ー竹田武子（同）大部ますみ（同）

附記 昭和四十一年十月三十一日から十一月三日まで開催の第十六回竜野市美術展で当町から出品の左記四名の諸氏が入賞されました。

工芸部　武野金霞（美術協会賞）西村英男（神戸新聞社賞）友沢庄二（ライオンズ賞）、書道部　堀一雄（美術協会賞）

県観光百選候補地

兵庫県政百年協賛の県観光連盟ら主催、観光百選の本郡内の候補地は、山崎最上山公園、揖保川中流、伊和神社、音水森林、鹿ヶ壺の五ヶ所で、入選発表は来年一月。

哀悼横井恕一氏

本会が、昭和三十三年三月再発足してから、ずつと本会役員で、会計事務一切を受持つて頂いていた横井恕一氏は九月十日急逝されました。その円満な人格と、熱意ある実行力によつて本会発展に多大の貢献をして下さいましたことは、周知の事で、氏の逝去は本会の大きな損失であります。

氏は、長年小学校教育者として勤務、校長を停年退職後町総代、町会議員など公職に尽瘁され、旧本多藩家中会の世話人、楠風閣の事務局など労多くして酬われない奉仕を多くされていた。行年七十才。謹んで哀悼申し上げます。

附記。本会々計事務は、入江静夫氏、闇斎神社の会計は三木金之助氏にお願いしましたので以後よろしく。

くすりは
サン薬局
薬剤師　志水育代
鴻ノ町
TEL 545

会員名簿 (21)

本町　久保雅資　山田立花あやめ
元山崎　山本　遼　〃　三宅さかゑ
山田町　森本美佐子　〃　坂口一郎
福原町　堀　蓮　中鹿沢　亀井保一
寺町　小寺新兵衛　〃　沢田実
大才町　政行平四郎　西鹿沢　長井鈴子
山田溝口佐代子　〃　松下君子
山田内藤チカエ　金谷田村敬二
鴻の町　段中五市　〃　長谷川清
植木野　多淵健次　富士野町　稲田とみゑ

雑報

○十月九日、佐用郡歴史研究会では、坂井隆会長以下十数人が当山崎町を訪問、山崎町の古蹟、名勝地を見学、郷土会有志と町観光関係課員らと青年婦人の家で懇談会を開催。

○十月十七日、山崎町西鹿沢の闇斎神社秋季例祭を挙行。氏神八幡神社秋祭りは、例年のとおり十五日で、雨にたたられ遺憾であつたが、各商店街が小供の樽御こしなどを繰り出してにぎわつた。

○郷土版の運営委員は左記のとおり。

安井寅一氏（長）、前野四郎氏（副）

入江静夫氏、根岸元彦氏、中谷治市氏、武藤林之助氏
福岡武雄氏、矢野寅之助氏、福井政男氏、田中稔氏

○本年夏頃出版された「播磨の彌生文化」著者上田哲也、河原隆彦両氏に宍粟郡山崎町青木出土の銅鐸が詳細に紹介されている。写真版など十点を掲載。

○岩井忠彦氏（広島）は、「播磨タイムス」に「宍粟郡山崎町の城下平野の条里制」と題して、連載中で、十一月十三日発行九十八号所載が第二回目、古代地理などを解説、相当詳細に論理を進められるので、啓発されるところ大であると期待される。

○山崎郷土版の内部装備も殆んど完成したので、その陳列品目の撰定、展覧方法など協議中で、四十二年一月より開館、一般の方に展覧してもらえる事と思います。